

# 石川県立美術館だより

平成14年11月1日発行 第229号

## 第49回 日本伝統工芸展 金沢展

11月1日(金)~10日(日) 会期中無休 午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)



朝日新聞社賞 鶺鴒の絵皿「昔日」 武腰 潤



日本工芸会保持者賞 曲輪造籃胎盤「黎明」 小森邦衛

### 目次

第49回日本伝統工芸展金沢展.....2	月例映画会 今月のイチ押し、他.....6
名物裂の精華、石川県の名宝.....3	企画展TOPIC(「脇田和」展 その2).....7
動物を描く、常設展示室 主な展示作品.....4	十一月の行事案内、各地の展覧会.....7
講演会記録(「大樋長左衛門の世界」展).....5	所蔵品紹介、第32回文化財現地見学.....8
美術館小史・余話(28)企画展示室.....6	

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

企画展示室(第7~9展示室)

# 第49回日本伝統工芸展 金沢展

11月1日(金)~10日(日)会期中無休

主催/石川県教育委員会・日本放送協会  
朝日新聞社・北國新聞社・日本工芸会  
後援/文化庁・富山県教育委員会・福井県教育委員会



日本工芸会奨励賞 臙銀象嵌壺「六月の雨」  
宮園士朗



日本工芸会奨励賞 香椿造盛器 川北浩彦



沈金箱「叢」 前 史雄



耀彩壺「恒河」 徳田八十吉



砂張銅鑼 魚住為染



平文富士瑞鶴平棗 大場松魚



櫛造盛器 川北良造



釉裏金彩鉄線文大皿 吉田美統

恒例の日本伝統工芸展を開催いたします。わが国は各地の風土に根ざした工芸品を生み出し、そしてその伝統技術を大切に継承し発展させてきました。本展は、優れた伝統技術の保護と後継者の育成ならびに伝統工芸に対する普及を目的として開催しているものです。

陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・その他の工芸(七宝・硝子・瑪瑙細工・截金・撥鏤など)の七部門の入選作品と遺作などの七五六点の中から、重要無形文化財保持者・受賞者等の基本作品と、石川・富山・福井の各県、及びその他の県の入選作品三五四点を展示します。

今回石川県内の入選者は九十六人で、都道府県別ではトップの人数です。陶芸の武腰潤氏が優秀賞の朝日新聞社賞、金工の宮園士朗氏と木竹工の川北浩彦氏がそれぞれ日本工芸会奨励賞を受賞し、鑑査委員・待望者の中から選ばれる日本工芸会保持者賞は、漆芸の小森邦衛氏が受賞しました。

また本年度の「特別展示わざを伝える」は「衣裳人形」伝承者養成研修会の制作作品を展示いたします。あわせて同会の研修風景を収録したビデオも上映いたします。

**◆列品解説**  
会期中十一月一日午前と四日午後を除く毎日、午前十一時と午後一時三十分からの二回、人間国宝の先生を含む出品者などによる列品解説を行います。

**◆テレビ放映**  
北陸三県のNHK総合テレビで、十一月三日(日)午前十時五分から本展の番組放映があります。再放送は翌四日(月・振休)午前十時二十分からです。

**観覧料**

個人	一般 600円	大学生 400円	高校生以下は 無料
団体(20名以上)	一般 500円	大学生 300円	高校生以下は 無料

当館友の会会員は受付での会員証提示により、団体料金でご覧になれます。

**講演会 聴講無料**  
演題 自分の歩んだ道  
講師 細見華岳氏  
(重要無形文化財「綴織」保持者)  
日時 十一月四日(月・振休) 午後一時三十分  
会場 当館ホール

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

# 名物裂の精華

10月31日(木)~11月20日(水)

名物裂とはそのほとんどが中国の宋・元・明の時代に製織されたもので、鎌倉・室町時代から江戸時代中期にかけて日本に舶載され、わが国の茶道をはじめ近世文化の成立に重要な貢献をした裂地類の固有名称です。内容は金襴、緞子、間道が主で、錦、風通、縹珍、ビロード、印金、モール、更紗などがあります。この舶載裂は書画の表装裂や、名物茶道具の仕覆として、当時の優れた鑑識眼をもつ茶人たちによって選択されたものです。

前田家の名物裂は、三代藩主前田利常の収集によるものです。寛永十四年(一六三七)、当時唯一の海外への窓口であった長崎へ家臣を遣わせ、買い求めさせたといわれています。利常の美意識には、他のいかなる大名の追随をも許さないスケールの大きさがありましたが、この名物裂収集にもそれが如実に表れています。

利常は茶の湯にこのほか関心を寄せ、小堀遠州との交流も深く、茶器の購入を相談したり、点前や道具について遠州に教示を受けている事が、今日に伝わる文書からうかがい知ることができます。それゆえ、利常収集の名物裂にも、当然遠州との関連は多大なものがあつたと思われれます。遠州は名物裂帖「文龍」を作製していますが、これは名物茶道具に用いた「好み裂」の裁ち残りを、そのまま見本として保存したものです。これが、のちに名物裂の名を生じさせた根本資料といえるものであり、さらには遠州によって確立された「好み裂」の美の基準が、のちの時代の名物裂の基準となっているのです。

今回は、金襴、緞子、錦、間道、モールなど三十五点を展示しますが、異国情緒あふれるエキゾチックな文様が、華やかな金襴で表された見事な「騎羊人物檜梅折枝文様金襴」や、錦を代表する「蜀江錦」、幾何学的な直線文様で鹿文や雲龍文を表した「有栖川錦」、錦の中では異色の絵画的な文様の「清水裂」など反物そのまま所蔵されているものが注目されます。

利常と遠州という二人の茶人によって生まれたと言っても過言ではない、洗練された美の世界をご堪能下さい。

石川県には、歴史的、芸術的にも優れた貴重な文化財が数多く伝えられています。

地域的にみまると、能登地区は、日本海の海上交通により大陸との接触が早くから行われ開けた地域で、歴史的な風土や文化を色濃く物語る文化財を中心としています。一方、加賀地区は、古代・中世において白山信仰や中央の社寺の荘園として開かれましたが、江戸時代になり前田家が加賀藩主となつて文化の展開をみせ、前田家を中心とする収集・育成された文化財が数多く伝えられています。

当館では、このような文化財、中でも美術工芸品を中心に収集活動を行っていますが、また県内の社寺等から貴重な指定文化財の寄託を受け、その保存・管理をしているものも少なくありません。そして県民の方々が先人の残した貴重な文化遺産を少しでも深く理解し認識していただくため、そうした文化財を公開しています。本年も、所蔵品・寄託品の中から、国宝・重要文化財に石川県指定文化財を加えた絵画・書跡・工芸・刀剣の十八点を展示します。

先般終了しました「利家とまつ加賀百万石物語展」にも初代藩主利家の奉加帳が出品されましたが、白山比咩神社へは、歴代藩主・奥方等から数多くの文化財が寄進されています。今回展示されます文化財のうちから、白山比咩神社所蔵の三点を紹介いたします。

●剣 銘吉光は、短刀や剣に優れた手腕を示した吉光の代表作ですが、三代將軍徳川家光の養女阿智子(清泰院)が四代藩主光高に嫁した際の持参品で、清泰院死去後の明暦三年(一六五七)に、子の五代藩主綱紀が母の冥福を祈つて奉納したものです。太刀 銘長光は、明暦四年に、大聖寺藩二代藩主前田利明より奉納されたものです。鎌倉時代の代表的な鞍で、黒漆螺鈿鞍は、富樫氏の一族である林六郎光明が戦勝祈願のために献納したものと伝えられています。

● 国宝 重要文化財

常設展示室(第2展示室)

特集

# 石川県の名宝

10月31日(木)~11月20日(水)



重文 黒漆螺鈿鞍 白山比咩神社蔵



重文 西湖図 秋月等観

常設展示室 第5展示室)

特集

# 動物を描く

～明治以降の日本画家による～

10月31日(木)～11月20日(水)



咆哮(右隻) 木島桜谷

わが国の絵画史を振り返ってみると、動物を描いたものは数多く見受けられます。古代、中世にあつては、そこにあらわれる動物たちは、画面の中で何らかの意味合いをもった、象徴的な役割を演じている場合が多いようです。つまり、動物それ自体が作品の主題というよりも、説話や神話、あるいは宗教的テーマを具現化する存在として、モチーフ化されてきたといえます。また、人間の生活に密着した存在として、異国の風俗を伝えたり、わが国の生活や風習の様子をかいま見せる作品も制作されてきました。

一方、近世に入ると、西洋の合理的なものの見方が普及しはじめ、洋風画や円山応挙に代表されるように、現実世界の有り様をそのまま写す写実という絵画表現が流行していきます。こうした流れの中で、次第に、純粹に動物をモチーフとして描く『動物画』と呼ばれるような作品が制作されていったといえます。

今回の特集では、当館に所蔵する近・現代の日本画の中から、動物に焦点をあて描かれたものを選び、展示いたします。これらは、おおむね写実を基本にし、それぞれの動物たちの個性や息づかいを巧みに描写しており、現代の動物画表現の一面を見ていただきたいと思います。

「展示予定作品」

- 木島桜谷 / 咆哮 / 明治三五年
- 友田九溪 / 月夜双狼図 / 大正二年
- 橋本閑雪 / 拾牛図 / 大正七年頃
- 木村雨山 / 獅子図 / 大正八年
- 下村正一 / 秋 / 昭和七年
- 紺谷光俊 / 秋宵 / 昭和
- 安嶋雨晶 / 牛 / 昭和
- 畠山錦成 / 山羊 / 昭和四九年
- 上田珪草 / 耄 / 昭和五二年
- 上田珪草 / チーター / 昭和五七年
- 梅川三省 / 大地の女神 / 昭和五七年
- 坂田三男 / 野牛 / 昭和六十年
- 中出信昭 / 遙か / 平成十年

前田育徳会展示室

特集 名物裂の精華

騎羊人物椿梅折枝文様金欄

小石畳地靈芝文様金欄(大燈金欄)

縞地梅花石畳宝尽くし段替り文様緞子(伊予簾緞子)

第1展示室

●色絵雉香炉

色絵雌雉香炉

野々村仁清

第2展示室

古九谷

色絵百花散双鳥図平鉢

青手樹木図平鉢

特集 石川県の名宝

太政官符 大伴家持自署

盛上菊図屏風 伊年印

金沢別院蔵

第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

油彩画

肖像

とべ

野焼

彫塑・造形

THE PREVAILING WESTER LIES

Composition 接

第5展示室(工芸)

色絵更紗文蓋付飾壺

蓬之棚

木彫衣裳人形「渦紋」

第6展示室(日本画)

特集 動物を描く～明治以降の日本画による～

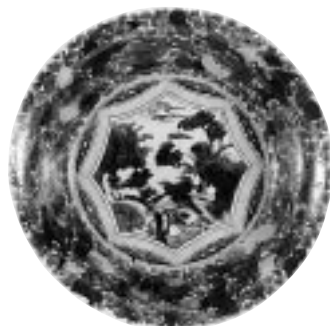
上の記事をご覧ください。

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		

観覧料



蓬之棚 松田権六



色絵百花散双鳥図平鉢 古九谷

常設展示室

## 主な展示作品

10月31日(木)～11月20日(水)

●=国宝 =重要文化財  
=石川県指定文化財

講演会記録

私の作陶人生

講師 大樋長左衛門氏（陶芸家）



私が生まれたところは、卯辰山の卯辰神社からちよっと上にある、五本松という、五本の大きな松があったそばでした。四季を通じて小鳥のさえずりを聞きながら、遊んだことが記憶にあります。

小学校から帰ってくると、父の家業の油薬を摺ったり、木を割ったり、窯焚きをしたり、そういうことが一つの仕事だったと思います。それから県立工業学校窯業科へ入学しました。父母や兄弟の期待を裏切らなかったということで、これは嬉しかったです。

そして東京美術学校へ進みました。当時は陶芸科というものが日本中どこにもありませんでした。それで一番造形的な、花瓶や置物も作り、レリーフとか建築的なものを含めると、やはり鍍金がいいのではないかとということをも父も誰かに聞いたりしていましたので、鍍金を選びました。ただし、戦時中の昭和十九年ですから、途中で海軍へ学徒動員で行きました。戦後になり美術学校を終えた後、家へ帰らず、京都国立陶磁器試験所へ行きました。理由は、外国の書物や写真集が多いことで、書庫まで入れてもらいあらゆることを調べたり、写真に起こしたりしました。

しばらくして、金沢へ帰ってきました。家業としては大樋焼をやっているわけです。茶碗、水指、香合、蓋置、花生などの茶に供する道具ですので、そんなに大きな、創意創作で勝負するということではできません。

最初の頃は双魚、鶉、金魚、木兔みみづくといったものを作りました。しかし大きな作品を作るには、どうしても窯を改良しなければならず、私なりに苦労しました。

さて、私の作品のモチーフは鳥が多いです。どうして鳥なのかとよく聞かれるのですが、一番可愛くて一番進行方向が似ているのは鳥だと思えます。鳥を見て気持ち悪いとかいう人は一人もいません。子供の時に遊んだ思い出がいまだにジョイントしていることとなるわけです。橋場町の家には文化財に指定されている大きな松がありますが、毎年梟が来ていました。本常にヨチヨチ歩きの時、父に紅雀をねだりました。きれいな真つ赤な鳥でした。それからジユウシマツ、これも沢山卵からかえて人にあげたり、鶉、梟、鶉は当然のことながら、よく飼育した思い出があります。それから美術学校の横が動物園で、よく行ったものです。鳥と私の出会いというのはそういうことです。

さて、好きな作家を二人あげるとすれば、富本憲吉先生と石黒宗麿先生でしょう。富本先生は、あるがままというか、生き様をそのまま展開してきたという感じがします。例えば模様から模様を作らないとか、形がきれいならば模様はいらないと、今では当たり前のことを言っています。そういうことを打ち出したというのは、インテリジェンスなんです。また若い頃にマイヨールの彫刻を見て、白い大理石の肌にはまた白磁の壺につながるというようなことを言っているんですね。かなり引いた理論的な判断と、豊かな芸境を持つていた人です。

石黒宗麿先生ですが、戦後よく金沢へいらっしやいました。その関わり合いは、字なんです。私が初めて見た一行為、凄いなあと思いました。陶芸家では一番かもしれない、私はそう思っております。それくらい字がうまい、うまいということは魅力があるということ

となんです。それから、野人的なあらゆるセクションにとらわれないところです。富山の新湊から京都へ出たのですから、それは大変苦労されたことと思えます。京都の組織というのは、伝統文化のメッカみたいなものですかね。

それから中国宋時代の黒絵だとか、柿釉であるとか、木の葉天目であるとか、写しの世界がありますけれども、当時はそういうものに挑戦しようとする人なんかいませんでした。だから私の作品も千点文があったり、柿釉があったり、木の葉があつたりそういう影響があります。これは真似事ではないんです。サンプル、見本というものがあつて作るんです。石黒宗麿先生もそれが好きでやつたと、私もそれが好きでやつたと、そういうことなんです。そういうことで文人的で非常に素人ばいスタートをしたお方です。

それで一方では、三百年以上の大樋焼茶陶と称するものを作り、また他の一方では誰もやらない新しいものを作るといふことで、これらを両方やっているわけです。そこを同じ力関係で、行ったり来たりして両輪を動かすということが私の手法かもしれません。

今度集大成の一世一代の展覧会をしていただいた百六十五点を見まして、よくやつたなということがまず一つです。それから大きなものをよくやりました。あの皿でも、当時は日本一大きなものを作つてやろうというところで、一番大きかったものです。いずれにしても温故知新、古壺新酒、古きを尊び新しさを知るといふことではなからうか思っています。今回の展覧会を鳥瞰的に眺めまして、これはまたやらなければいけません。意欲に湧いております。

（日本芸術院会員 大樋長左衛門の世界展にちなんで、五月十二日にホールで行われた講演内容を、当館の責任で要約したものです。）

美術館小史・余話 28

嶋崎 丞 すむむ 当館館長

私の長い美術館生活の中で、最も語りたくないことを書かざるをえない時がやってきた。

それは昭和四十六年六月二十六日から七月二十五日まで開催した「日本名刀展」の初日と、七月十八日未明に起きた二つの事件のことである。

初日の事件とは、閉館間際の午後三時五十分頃、某大学三年の学生が展示ケースのガラスを破って中に入り、展示中の重要文化財の名刀を使って割腹自殺を遂げたこと。そして七月十八日未明の事件は、犯人が展示室非常口扉の蝶つがいを切り取り、扉を外からこじあけて展示室に侵入し、展示中の名刀を盗み出したことである。

初日の事件後、職員と刀剣保存協会幹部の方々と話し合った結果、展示室の監視体制をしっかりとやりやればこのような事件は起こらないだろうということで、四日後に再開したが、残念なことに十八日の盗難事件が起きてしまった。

盗難事件の方は、その後犯人が逮捕され、名刀は無事返ってきた。しかし、この二つの事件によって美術館が受けた痛手は計り知れぬ大きなものがあった。次期展に予定されていた「備前のやきもの」展出品交渉のため、所有者宅を訪問した時、「盗難や割腹事件を起こしながら、よく大切な美術品を借りにこられたものだ。」といわれた言葉が、未だに私の耳元に残っている。あの時のみじめな気持ちは二度と味わいたくないという思いは、今でもいっぱいである。日々新たな気持ちで常に初心に返り、細心の気配りをしながら仕事をやっている今日この頃である。

日本名刀展事件

企画展示室

第13回石川県水墨画協会公募展

十一月十三日(水)～十七日(日)

(第7・8・9展示室)

石川県水墨画協会は、平成元年発足、同二年に第一回公募展を開催し今日に至っております。公募展は石川県内の水墨画諸会派及び一般個人を統合する当協会が行う展示会です。これは、過去の公募展の実績に照らし承認された会員の研鑽の場であると同時に、広く県内より一般公募し、厳正な審査の上入選作品を展示し、水墨画の普及発展に寄与することとしております。従って各会派主宰の作品を始め、会員並びに一般公募の意欲的個性的な表現による、楽しみな協会展ならではの作品をご覧頂けるとおもいます。

多くのの方々のご来場をお待ちしております。

入場無料

連絡先 金沢市三ツ屋町八一八 三

事務局長 笠井幸州(利久)  
会 長 小川伸洋  
理事長 尾坂杜風

アート・ナウKANAZAWA

第41回北陸中日美術展

十一月二十三日(土)～十二月八日(日)

(第7・8・9展示室)

部門 平面・立体(工芸を含む)  
現代美術の創造を目指す本展は、新人作家の登龍門として幾多の新進作家を送り出しており、毎年、個性豊かな力作が数多く出品されます。

全国から応募のあった作品を、美術評論家・針生一郎氏、宇都宮美術館館長・谷新氏の両先生に審査していただき、選ばれた作品約百五十点を展示します。

入場料

一般・大高生七〇〇円(五〇〇円) 中学生以下無料

( )内は団体料金

当館友の会会員は、会員証提示により団体料金扱い。

連絡先 金沢市香林坊二 一七 一五

北陸中日新聞事業部  
☎〇七六 二二三三 四六四二

月例映画会  
今月のイチ押し

文化財保護強調週間!!

十一月は、一日から七日まで、文化財保護強調週間にあたることから、今月の映画はそれにちなんで、次の文化財保護に関する映画を上映いたします。

十一月十七日(日)

「甦る文化財 表装の技術」(48分)

十一月二十四日(日)

「文化財を守る人たち」(44分)

「甦る文化財 表装の技術」は、重要文化財に指定されている絵画や書跡を例に、具体的な修復の過程を丹念に紹介しています。一方「文化財を守る人たち」では、伝統的な建築物や仏像、民俗的な文化財を対象に、その保存や取り扱いの技術の粋を見ることが出来ます。

これらの映画を見ると、文化財の保護、修復に携わる人たちが、たゆみない努力と忍耐によってつちかっただけの技術を駆使し、貴重な文化財を後世に伝えるべく、強い責任感をもって作業にあたっているのがわかるでしょう。普段、めったに見ることのできない舞台裏を、この機会にご覧いただき、文化財保護の重要性を、あらためて再認識していただければ幸いです。

次回の展覧会

天神画像と文房具 (前田育徳会展示室)

大乘寺の文化財 (第2展示室)

藤井外喜雄 ミニアチュールの世界 (第3展示室)

十一月二十三日(土)～十二月二十三日(月・祝)



二人 昭和17年

企画展TOPIC

脇田和 画家としての歩み

脇田和氏は明治四十一年東京青山の生まれです。父の勇は金沢出身の実業家、シンガポールやサイパンに会社を創ったり、ヨーロッパからの輸入品を扱う貿易関係の仕事をしたりと手広く事業を展開しました。また、赤坂区の区会議員に二度当選するなど、なかなかの名士であつたようです。趣味も多彩で、絵や骨董、お茶や謡いなどを好み、画会を開いたり、画学生を自宅に招いて襖絵を描かせたりと、とても魅力的な人物像が思い浮かびます。家は広大なもので、敷地に大きな池はむろんのこと、裏には森までがあり、幼い和氏はバードウォッチングや鳥の写生をして育つたのでした。

和氏は十二人兄弟で上から三番目の次男坊でしたので、家を継ぐ必要もなく、父は画家となることを願つたようです。はじめは日本画家だったのですが、家具などの買い付けにヨーロッパに出向いた父勇が油絵に魅せられ、いつのまにか和氏は油彩画家となるべく、レールが敷かれたのでした。

大正十二年、十五歳の和氏はドイツへ留学することになります。それは姉が某商事のベルリン駐在員と結婚するに際し、姉一人では寂しいだろうから同行するようにと父から勧められたのでした。ベルリン国立美術学校に学び、昭和五年に卒業して帰国するまで足かけ八年間の留学は、画工とい

うべき様々な職人的技術を身につけようと自ら意図したもので、これが、後年脇田氏が挿絵や版画、コラーージュ等を手がける基礎となつたのでした。

この留学生活はその始まりと終わりに二人の身内の死を

迎えることとなってしまいました。和氏がマルセイユに着くのは大正十二年九月二日、前日日本では関東大震災がおき、長兄が亡くなつてしまつたのです。そして昭和五年、卒業を数日後に控えた九月十八日、父が五十二歳で死去し、和氏は優秀な学業の証として金メダルと卒業証書を手し、帰国の途に着くのでした。

それからの約十年間、脇田氏は父の事業の整理に奔走することになります。画家として立てるかどうかわざいぶん迷われたようでもあります。昭和初期、画壇には東京美術学校というものが確固としてあり、留學生が目指すのはたいがいフランスでした。ドイツの美術学校で学んだ脇田氏には、画家の知人はまったくいないという状況です。こうした中で、光風会展や帝展に出品を重ね、若手の画家達と交友を結び、昭和十年から始まる帝展改組の混乱期に、その年改組に反旗を翻した洋画部の画家達によって組織された第二部会展で特選と昭和洋画奨励賞を得て、画家として立つ決心がついたのでした。

翌十一年は、脇田氏がよき先輩や仲間を得て生涯の制作発表の場となる新制作派協会を結成する年ですが、それは次号で述べることにいたします。

「鳥と語る 詩魂の画家 脇田和」展  
一月四日(土)～二月二日(日)  
(二木伸一郎 学芸専門員)

各地の展覧会

十一月

開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

- 日本・インド国交樹立50周年記念  
インド・マトウラー彫刻展 12/15まで
- 東京国立博物館(東京都台東区・〇三三 三八三三) 一一一
- 傾く小屋 美術家たちの証言 since 9.11 12/15まで
- 東京都現代美術館(東京都江東区・〇三三 五四五四) 四一一
- 昭和の桃山復興展―陶芸近代化の転換点― 11/24まで
- 栗園近代美術館(東京都千代田区・〇三三 三三三三) 七七八一
- 山本容子の美術遊園地 12/25まで
- 富山県立近代美術館(富山市・〇七六 四二二) 七一一
- 開館十周年記念 ミロ展 1918-1945 12/1まで
- 愛知県美術館(名古屋市中区・〇五一 一九七一) 五五一一
- 悠々と―小倉遊亀展―人、花、こころ 11/24まで
- 滋賀県立近代美術館(大津市・〇七七 五四三二) 二二一一
- ピカソとエコール・ド・パリ メトロポリタン美術館展 11/24まで
- 京都市美術館(京都市左京区・〇七五 七七七一) 四〇〇七
- 修理完成記念 特別陳列「一遍聖絵」 11/10まで
- 京都国立博物館(京都市東山区・〇七五 五四一一) 一一五一
- 第54回正倉院展 11/10まで
- 奈良国立博物館(奈良市・〇七四 二二二) 七七七一

十一月の行事案内 《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月 日	行 事	内 容	会 場
11/4	講演会	「自分の歩んだ道」	ホール
(月・振休)			
11/9(土)	土曜講座	仏像 43 妙法院と三十三間堂 講師 細見華岳氏(重要無形文化財「綴織」保持者)	ホール
11/16(土)	土曜講座	名物裂の精華 (高嶋清栄 学芸専門員)	講義室
11/17(日)	月例映画会	甦る文化財 表装の技術(48分)	ホール
11/24(日)	月例映画会	文化財を守る人たち(44分)	ホール
11/30(土)	土曜講座	洋画家列伝 13 猪熊弦一郎 (二木伸一郎 学芸専門員)	講義室

今月の全館休館日は十一月二十一日(木)・二十二日(金)です。



**Mserere** (ミゼレーレ 6)  
中村晋也 大正15年(1926)~

平成8年 1996

第28回日展

高175.0 幅53.0 奥行47.0 (cm)

Miserereとは、ラテン語で「憐れみ」を意味する言葉です。旧約聖書の詩編に登場することから広く知られており、罪に汚れ、悲惨な生活をおくる人々が、神に救いを求めるときの祈りの言葉ともいえます。フランスの画家ジョルジュ・ルオーに「ミゼレーレ」という題名の連作版画もあり、中村氏もその版画のもつ敬虔な表現にうたれ、触発されてこの彫刻「Miserere」の連作を始めたと自ら語っています。

両腕を身体にそって垂らしており、その姿は神の慈しみをまさに受けとろうとしているかのようなようです。肉をそぎ落とし、衣裳を削ったほっそりした表現は人体の微妙なバランスに成り立っており、地上から飛び立つような浮揚感をも感じさせます。悩み、悲しみそして一転して安らぐ表情を的確に表しています。

中村晋也氏は大正15年、三重県に生まれました。古賀忠雄に師事し、日展や白日展に出品したことから、当時白日会彫刻部を率いていた石川を代表する彫刻家・吉田三郎とのかかわりも深いものがありました。昭和40年代よりたびたびフランスへ留学し、アペル・フェノサに師事しています。日展で活躍し、芸術院会員となるかたわら鹿児島大学で長く教鞭をとり、現在は鹿児島の地に中村晋也美術館が開設され、中村芸術の全貌をうかがうことができます。

### 参加者募集

期 日 十一月十六日(土)~十七日(日)

一泊二日、宿泊は神戸市。

参加費 二四、〇〇〇円

(友の会会員以外の方は二五、〇〇〇円)

募集定員 四十五名(対象は原則として成人)

見学予定地

逸翁美術館(池田市) 満願寺(川西市) 柿衛文庫(伊丹市) 伊丹市立美術館(伊丹市) 相楽園(神戸市) 神戸市立小磯記念美術館(神戸市) 香雪美術館(神戸市) 芦屋市谷崎潤一郎記念館(芦屋市)

お申し込みの方法

例年参加ご希望の方が大変多いため、事前に参加希望者全員の立ち会いのもとで厳正な抽選を行い、申し込み者を決定させていただいております。当選の方はその場でお申し込みを受けいたします。今回の抽選会は十一月十日(日)の予定です。ご希望の方は当日午前十時三十分までに当館ホールへ直接ご来場下さい。詳細は本紙前号をご覧ください。

### 訂正とお詫び

前号でお知らせいたしました参加申し込み抽選会の時間に、誤りがありましたので訂正いたします。また皆様に大変ご迷惑をおかけしたと、深くお詫びいたします。

訂正箇所 だより前号の5頁下段六行目

① 誤) 午後十時三十分 ② 正) 午前十時三十分

### 休館日

十一月二十一日(木)・二十二日(金)

### 石川県立美術館だより

第一二一九号 平成十四年十一月一日発行

〒九一〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(三三)七五八〇

FAX 〇七六(三三)四九五〇